

新年の詩

灯す

山の神々しさ
純白の雪の清さ
凍てつく天空

カレンダーが替わると
風景全体も新年となる

降る雪も
裸の木々も
人々も

万物は希望の光を心に灯し始める

遠く何かの足跡が
森の奥まで伸びている
それは

希望を叶えるために
山の神に手紙を届ける使者の足跡

1月

2月

二月の詩

立春

マイナス8度

厳寒の厳冬の立春

雪の結晶が立春を祝う

深い眠りの木々

冬眠中の生き物も

皆この日は一瞬春を夢見る

厳冬を溶かす虹色の夢を

押し寄せる純白の雪原色

晴れ間の木々の影の濃さ

スノーシューの音と歓声

三月の詩

3月

光

光を見ればよい

日一日と伸びて

大自然の雪原のあちらこちらで
遊び始める

白樺の枝先に

小鳥のくちばしに

リスの尾にも遊び始める光

そっと影を見ればよい

雪の上に写る枝先の影の濃さを
風でゆらぐ枯れ葦の影の動きを
小鳥の羽ばたきの影の力強さを

春への王手

耳を澄ませば

どこかでへ生を運び始めた
雪解けの音

呼吸

妙高が春の呼吸を始めた
新緑の宝石の芽吹きを
木全体から押し出すために
山全体が淡く染まり
固い外套をぬぎすてて
芽吹きの時を静かに待つ

いもり池の静寂の中の
かすかな気配達

木々や小鳥
まだ雪の下で

夢にまどろむカエルや昆虫
池の泥の中で眠る

イモリや魚類に
光の目覚まし時計が
時を知らせる
そして歩き始めた人々にも

雪形のへはね馬は
春の妖精を躍らせる

4月

5月

春の祭典

小さな祈りの妖精

水芭蕉

静かなざわめきからの解放

連続する果てのない音

水の流れが指揮する

緑の風がゆりおこす

万物(ばんぶつ)はダイナミックに

春色を風景に塗りつける

もえぎ 緑 白 青 光・・・

カモ、ノジコ カッコー

空を切りさくオオヨシキリの声

いもり池のフナは

水面から空へと波紋音で伝える

春の祝福を

全てが春を押し上げる

〈逆さ妙高〉に春の凝縮(ぎょうしゅく)

人は眩しさ(まぶ)にうたれる

初夏の風

色とりどりの帽子が
深緑の中へ消えて行く
歓声を残しながら

妙高 戸隠連山

初夏の風

木漏れ日に
いもり池の睡蓮に

景色を見渡し

ゆっくりと歩むひと時

タニウツギ モノサシトンボ

目を凝らせば

白い泡の中で生命を燃やす

モリアオガエルの数百の黒い眼・・・

全てが緑に溶けこむ中で

やがて彼らは雨を呼び

なだれ落ちるように

水の中へと旅立つ

初夏の風

6月

夏休み一
子どもたちへのポエム

7月

食べてごらん 夏の風を

さわってごらん

カブトムシの力強さを

遠く入道(にゅうどう)雲(ぐも)が
のびあがる

走ってごらん 森の中を

聞いてごらん 苗名(なえな)滝(たき)の
響(ひび)きを

君たちが夏をよび

夏が君たちをよぶ

だから

高原(こうげん)の生(い)き物(もの)も
植物(しょくぶつ)や雲(くも)も
うれしくなっ

ときどき夕立(ゆうだち)のシャワーを
麦(むぎ)わら(むぎわら)帽子(ぼうし)に
プレゼントする

夏休みが来たぞ この高原に
みんなの笑い声を

やまびこがつかまえて
キャッチボールする

8月

夏休み2

子どもたちへのポエム

赤い腹(はら)のイモリ

ヘリのようなオニヤンマ

オオクワガタのゲツト

うれしくなるのだ

すっかり学校をわすれて

歓声(かんせい)が青空にこだまする

子どもも大人も。

すっかり子どもに

もどっているのだ

パパとママも

涼(すず)しい風とかけっこする

大自然(だいしぜん)の〈今〉という時間

君も風となって

ツリフネソウがゆれたよ

大きな入道(にゅうどう)雲(ぐも)と

あくしゅする

森の学校

9月

ひこさの滝（笹ヶ峰）

上から見下ろす　ひこさの滝
下から見上げる　ひこさの滝

青空が秋色に澄んでゆく
流れ落ちる滝は
秋の気配を押し流し
とどまることを知らない
ツリフネソウ　タチアザミの花がゆれる

どこまでも澄む水の流れ
谷川の

その流れに笹舟をうかべ
遊ぶ山彦たち
夏を惜しむように

君は出会えるか
山彦の笑顔に
澄んだ心がパスポート

天高く

10月

十月の空は

人の気づかない所で

渡り鳥が

南に向かい

北から渡って来る

澄んだ空は鳥たちの交差点だ

オオヨシキリ キビタキ

オオルリ ノジコ

ツグミ アトリ

マヒワ 白鳥 鴨

天高く あるいは低く

空は翼で満ちている

その羽音を聞くのは

空を見上げる者の想像力だ

十月の空に

妙高山山頂からさらに空の真上へと視点をのぼし

天の中心に 自分を立て掛けてみる

渡り鳥は地球の球体を知り

飛び続け

ぼくらはしっかりと空を見上げ

世界について少し考える

11月

湯に浸かれれば

例年より20日も遅い妙高山の冠雪

10月30日のことだ

暖かかったせいか、不鮮明な紅葉に戸惑った生き物たち

しかし

届いた冠雪と寒風にやはり今年も来たかと

安堵の気持ちも少しはあるのだ

生き物たちにも人間にも

白濁した燕の湯に浸かると

溪谷の黄葉が鮮明に迫ってきた

赤倉の湯に浸かると

地獄谷の水蒸気が立ち上っていた

雲間から見え始めた紅葉の中に

湯の中で目を閉じて知る人生の移ろい

目を開いて知る季節の推移

コマユミの葉とツルウメモドキの実の鮮明な赤霜月の冬の入り口の。

あのね

あのね
冬が来たよ 妙高の高原に
飛切りの純白を連れて

12月

あのね

クリスマスが来るよ
窓の中ではリース作りの笑い声
身体が躍るよ 心うれしくて

あのね

お正月が来るよ
何だか引き締まるね
一年がやがて終わるね

あのね

きつとね
イモリ池に眠る鯉やヤゴも
山の熊さんやヤマネ君も
夢見ているよ
たくさん遊んだことを

あのね

一年の悪いことも善いことも
純白の雪をかぶせて
一からの出発だよ

あのね

あのねの僕は

森だよ 高原の